

6 自動車の唄

(ウォーダー通りのボーダー・バラッド)

「こりゃあ—景気付けに一杯やったせいだな」

しゃがんだ医師が見立てた

それから^{ボビー}警官らに起こせと命じた

ガイシャはすでに死亡と判断したからだ

^{ボビー}警官らはガイシャを起こし また横にした

5

(だがああ ガイシャはびくりとも動かなかった)

^{ボビー}警官らは町まで遺体を搬送した

^{コロナー}でばり
検死官の出張を待つためである

^{ボビー}警官らは遺体の顔を白布で覆った

霊安室の扉が閉じられた途端

10

市場に止めてあった車らが

交通事故談義をはじめた

まず御所御用達の燃料タンクを搭載した

車幅の広いディムラー車が切り出した

「洛外の田舎道をきれいにせんといきまへんなあ

15

でも誰もおおきにとゆうてくれへんわ

「魂が罪から浄められるよう田舎もんが

村のお寺でお参りしてはるときに

あてらがボンネットをあげてエンジンを冷やして^ひいると

酔っ払いがぎょうさん集まってきはる

20

「しばらく辛抱しようと思てたんやけど

そいつらは いよいよ付け上がりくさっててんごしますねん

車輪にかます板バネに挟んでやって痛い目に遭わすほうが

^{たあ}お母様の膝の上で甘やかされよりよっぽど賢こうなるってもんやおまへんか」

次に横柄なアームストロング車の番だ 25
シドレーがそいつの名前
「グラントム村まで来たところが
裸のまんま冷たくなっている奴を見かけたんだ

「小川のそばに見通しの悪いカーブがあってね
ガードレールがあり その向こう急な崖になっていた 30
その飲んだくれをすれすれに追い越したんだが
なんだまだぴんぴんしてやがる

「濡れた道 乾いた道 いろんな道を走ったよ
それにほの暗い森を抜ける道
でもなぜ罪のない歩行者が死ななきゃいけないのだ 35
わけが分からんよ」

ついでベイズ・オースチンちゃんがしゃべり始めた
二人座るのがやっとのチビ車^{くるま}
「事故はね 時とかあ 場合とかあによるじゃん^{ばやい}
運転する人とかあによるよね^{しと} 40

「可愛子ちゃん^{かわい}を乗っけている人いるじゃん^{しと}
男の子ったら片腕まわしちゃってサ 口を近づけてサ
ほら言わんこっちゃない
そんなことしてるから二人とも死んじやったのよ

「日の暮れだったワ 事故ったんは 45
斜めにチューツて キスなんかしちゃって
何で二人が死んだのか分かんないワ
でもほんと 誰が悪いのかしら」

「真っ黒いタールとかあ ヒースとかあ
小石とかあ そんなの轢いたことってあるけど^ひ 50
でもなぜ若い人死んじやったんだろう^{しと}
わけ分かんないの」

オクスフォードのモーリスが陳述した
(カウリー会修道士の親戚みたいなものだ)

「鉄とガソリンの火で走る車の事だ どう裁けばいいのだ	55
「地下の油田と 空から落ちる雷光の狭間で 俺たち冒険前進あるのみだ 人類が考案したものを大切に守って	60
「とろっぴき飲んで轢かれて死んだのなら 哀れな奴よと同情し 正気を失った酔っ払いを家に引きずって届け 家で待ってるかみさんの手間を省いてやるなどごめんだね	
「イングランド中探したって 泥酔者が安全に歩ける道などないよ 前後左右に気を配り しっかり見るしきやないではないか	65
「いつでも お目目を ぱっちり開けて ブーツと鳴りゃ 脇へ逃げ どぶ溝に飛び込み 高い土手に登るが勝ちよ	70
「呑んで歩こうが 思案顔で歩こうが 恋に浮かれて歩こうが おれたち車は知ったこっちゃない 殺っちまうか 怪我を負わせるか二つに一つ	75
ポビ―警官らはガイシャの顔から白布を取った コロナー検死官はその顔をつくづく眺めた 市場にしばらく足止めくらった車らは やがて何事も無く走り去った	80